

市川市国府台遺跡第13地点

— 国立精神・神経センター国府台病院施設増築埋蔵文化財調査報告書 —

平成13年3月

国立精神・神経センター国府台病院
財団法人 千葉県文化財センター

いちかわ し こう のだい い せき

市川市国府台遺跡第13地点

— 国立精神・神経センター国府台病院施設増築埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告第408集として国府台病院の増設事業に伴って実施した市川市国府台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、歴史時代の住居跡から土器が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年3月30日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、国立精神・神経センター国府台病院による国立精神・神経センター国府台病院施設増築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市川市国府台1丁目2番地2に所在する国府台遺跡第13地点（遺跡コード203-003）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国立精神・神経センター国府台病院の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員 田島新 が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、国立精神・神経センター国府台病院、市川市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「船橋」(NI-54-25-2-1)、「松戸」(NI-54-25-2-2)
第2図 市川市発行 1/2,500都市計画図「No.8」「No.12」
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年に撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
第2節 調査の方法.....	1
第3節 遺跡の位置と環境.....	2
第2章 古墳時代～奈良・平安時代.....	7
第1節 住居跡.....	7
第2節 土坑.....	8
第3節 その他.....	9
第3章 まとめ.....	14
第1節 古墳時代～奈良・平安時代.....	14
第2節 その他.....	14

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	3	第6図 001住居跡出土遺物	12
第2図 遺跡周辺地形図.....	4	第7図 005住居跡出土遺物	12
第3図 調査状況（下層・上層）.....	6	第8図 003土坑出土遺物	12
第4図 001住居跡平面図・断面図	10	第9図 グリッド出土遺物	12
第5図 005住居跡平面図・断面図			
003土坑平面図・断面図	11		

表目次

第1表 遺物観察表.....	13
----------------	----

図版目次

- | | | | |
|------|---|------|---|
| 図版 1 | 遺跡周辺航空写真(約1/10,000) | 図版 5 | 005住居跡（南から）、003土坑、
005住居跡・003土坑（西から） |
| 図版 2 | C区基本層序、A区全景、B区全景 | 図版 6 | 出土遺物 |
| 図版 3 | C区全景、001住居跡カマド断面、
001住居跡断面 | | |
| 図版 4 | 001住居跡（西から）、001住居跡
(南から)、005住居跡（西から） | | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

これまで平成7年度から平成10年度にわたり国立精神・神経センター国府台病院では、病院施設の増築工事を進めており、市川市教育委員会が確認調査を行ってきた。平成11年度も工事に当たり、区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取扱いについて千葉県教育委員会に照会した。これに対し、千葉県教育庁生涯学習部文化課では予定地内の埋蔵文化財の所在について踏査し、予定地は国府台遺跡の一部であり、埋蔵文化財の包蔵地である旨回答した。この埋蔵文化財の取扱いについては国立精神・神経センター国府台病院と文化課の間で協議が行われ、事業の性格上現状保存が困難であることから、記録保存の措置を講ずることとなった。上層については当初から遺構が予想されたことから、確認調査は行わず、上層の本調査及び下層の確認調査・本調査が財団法人千葉県文化財センターに委託された。

千葉県文化財センターによる国府台遺跡第13地点の発掘調査は、平成11年8月2日から開始され、平成11年8月27日までに調査対象面積256m²の調査を終了した。調査の結果、上層については古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の土坑1基、中世以降の溝2条などの遺構を検出することができた。住居跡からは、遺存状態の悪さにもかかわらず、多数の土師器・須恵器などが出土し、古墳時代～奈良・平安時代の当地域の様相を知る上で、貴重な資料を得ることができた。下層については遺物が出土しなかったため、確認調査で終了した。

平成12年度から整理作業が開始されて報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業に係る各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

平成11年度

期 間	平成11年8月2日～平成11年8月27日
組 織	調査部長 沼澤 豊、西部調査事務所長 及川淳一 担当職員 研究員 廣瀬和之
内 容	発掘調査 本調査上層256m ² 、確認調査下層16m ²

平成12年度

期 間	平成12年12月1日～平成12年12月28日
組 織	調査部長 沼澤 豊、東部調査事務所長 折原 繁 担当職員 上席研究員 田島 新
内 容	整理作業 水洗・注記から刊行まで

第2節 調査の方法

調査対象範囲全城に、公共座標に合わせて東西南北に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1、2、3、……とし、西から東へA、B、C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内には2m×2mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00、01、02……として南西隅を99とした。グリッド名はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、2B-14のように表示することにした。

上層については当初から遺構の検出が予想されたことから確認調査は行わず、下層について $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを調査対象面積の4%に設定して確認調査を行った。その結果、上層については古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑1基、中世以降の溝2条などの遺構が確認された。下層については遺物が出土しなかったため、上層256㎡についてのみ本調査を行うこととなった。

平成11年度の本調査は3か所に分かれており、それぞれA区、B区、C区と呼称した。

発掘調査時において遺構は種類に関わらず001から005まで番号のみを付けて調査が行われた。整理の段階でも遺構番号は変更せずそのままにし、その後に遺構の種類を付した。

第3節 遺跡の位置と環境（第1～3図）

国府台遺跡第13地点は、千葉県市川市国府台1丁目2番地2に所在し、江戸川東岸の標高約23mの国府台上に広がる国府台遺跡の一部である。市川市教育委員会では広い範囲にわたる国府台遺跡をいくつかの地点に分けて調査しており、第13地点は国府台病院の敷地全体が相当する。第13地点については、平成7年度・平成8年度・平成10年度に第13地点-1、第13地点-2、第13地点-3の確認調査を進めており、平成12年度にも第13地点-4の確認調査を行っている。

はじめに国府台遺跡の立地する国府台についてふれておく。市川市北部には、下総台地の南西端を開析した柏井台・曾谷台・国分台の3つの台地がある。これらの台地の中で最も西側に位置する国分台は、さらに先端を六反田支谷により東西に開析されている。この東西に開析された台地の東側を国分台、西側を国府台と通称している。さらに、この国府台から南東にのびる台地があるが、須和田台と呼ばれている。国府台遺跡はこの国府台上の南西部にある。

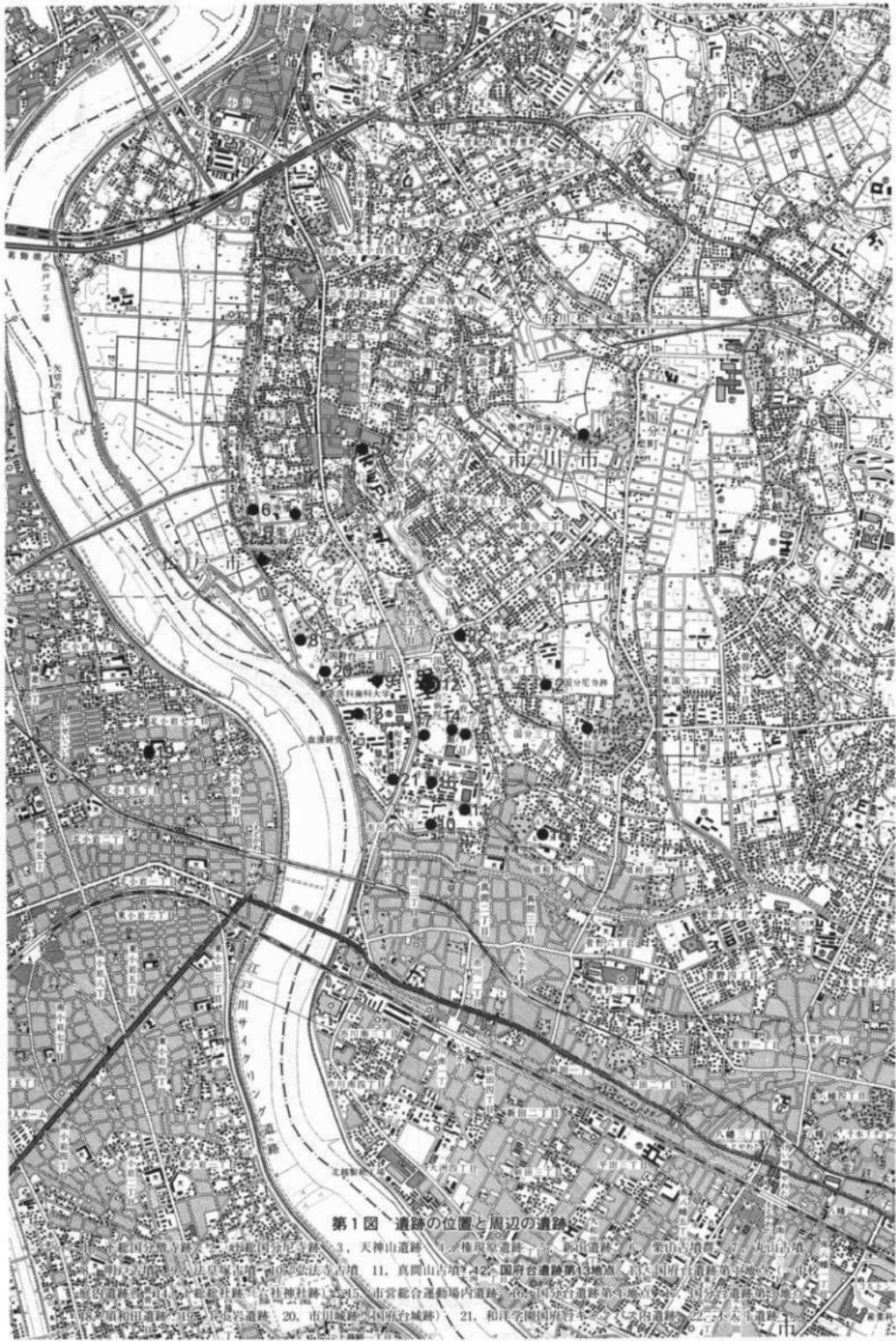
国府台遺跡は「国府台」の名のごとく、古代下総国府の所在地と推定されており、六反田支谷を隔てた東側の国分台上には下総国分僧寺跡、下総国分尼寺跡などが存在し、他にも周辺には学史上名高い遺跡が数多く存在する。この地域については先学による文献が多いことから、国府台及び国分台で本遺跡に關係する古墳時代後期以降の主な周辺遺跡を概観しておくに留めたい。

国府台では古墳時代後期以降、遺跡数が増加するが、まず下総国府設置に先立つ古墳時代後期の遺跡として、国府台古墳群（第1図7～12）が注目される。国府台古墳群は6世紀以降の構築で前方後円墳3基と円墳1基が現存し、隣接する栗山古墳群（第1図6）を含め、周辺の中核をなしている。特に、法皇塚古墳（第1図9）¹¹からは多数の副葬品を出土している。国府台の主要な遺跡としては、下総社跡遺跡（六社神社跡）（第1図14）¹²、国府台遺跡第1地点（一中校庭内遺跡）（第1図13）¹³、国府台遺跡第3地点（第1図17）、国府台遺跡第4地点（第1図16）、国府台遺跡第5～11地点¹⁴、和洋学園国府台キャンパス内遺跡（第1図21）¹⁵、国府台遺跡第13地点（第1図12）¹⁶、市営総合運動場内遺跡（第1図15）¹⁷、新山遺跡（第1図5）¹⁸、などがある。

国府台南東端の須和田台上には須和田遺跡（第1図18）¹⁹があり、弥生時代中期から平安時代までの遺構や遺物が確認されている。

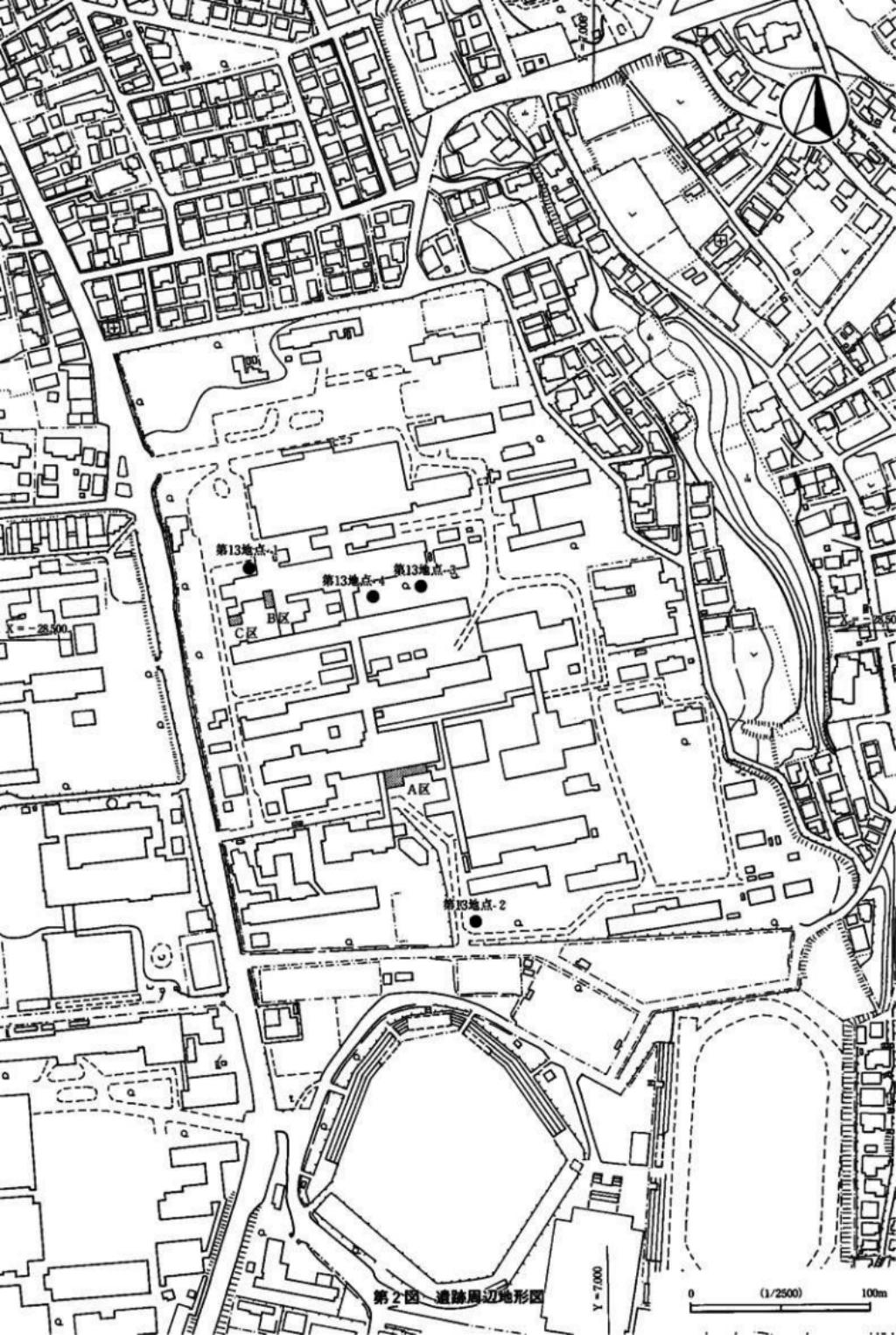
また、国分台上には下総国分僧寺跡（第1図1）²⁰、下総国分尼寺跡（第1図2）²¹、椎現原遺跡（第1図4）²²、下総国分遺跡などの奈良・平安時代を中心とした遺跡がある。

国府台と国分台を分ける六反田支谷には、奈良・平安時代～中世の遺物が出土した不入斗遺跡（第1図



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 真間山古墳 2. 市川古墳 3. 天神山遺跡 4. 椿原原遺跡 5. 鮎川遺跡 6. 鮎川古墳 7. 田中古墳 8. 田中古墳 9. 田中古墳 10. 田中古墳 11. 真間山古墳 12. 国府台遺跡 13. 田中古墳 14. 田中古墳 15. 田中古墳 16. 田中古墳 17. 田中古墳 18. 田中古墳 19. 田中古墳 20. 由川城跡(国府台城跡) 21. 和洋字園(国府台キララ)内遺跡 22. 木大寺遺跡



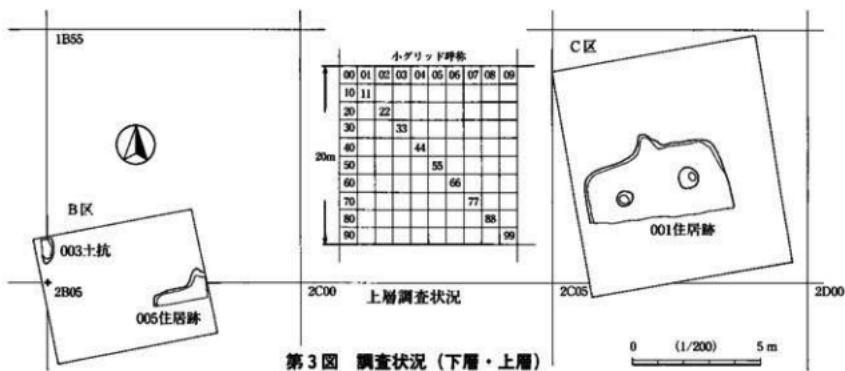
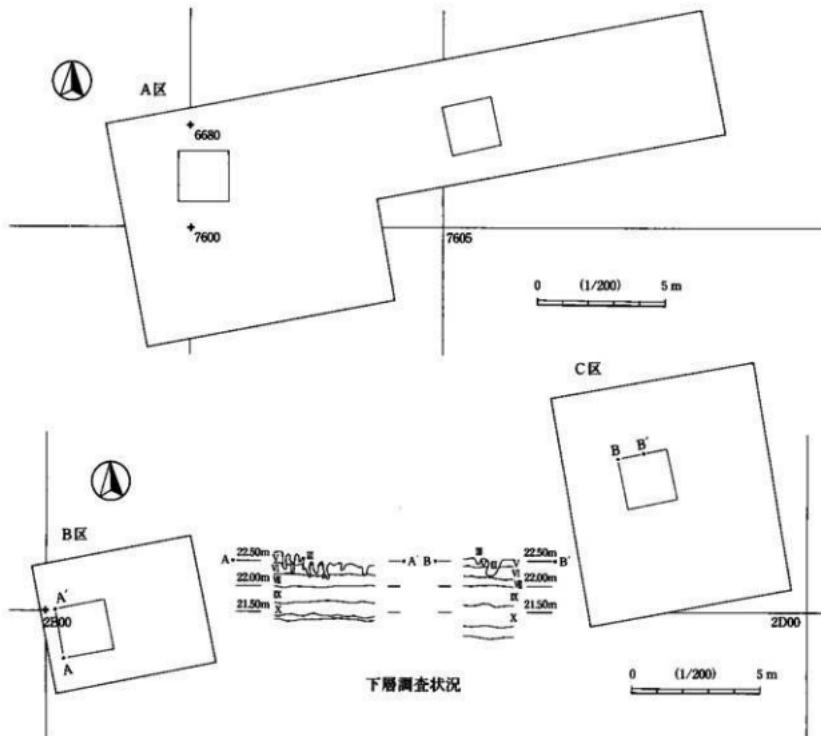
第2図 遺跡周辺地形図

22)¹³ がある。

さらに、千葉県内の遺跡ではないが、江戸川の対岸には「下総国葛飾郡甲和里」に推定されている上小岩遺跡（第1図19）がある。

中・近世の遺跡としては市川城跡（国府台城跡）（第1図20）¹⁴などが挙げられる。

- 注 1 「法皇塚古墳」市立市川博物館研究調査報告第3番 市立市川博物館 1976
- 2 「市川市出土遺物の分析－古代の鉄・土器について」市川市教育委員会 1996
- 3 「平成2年度 市川市埋蔵文化財発掘調査報告」市川市教育委員会 1991
- 4 「平成7年度 市川市内遺跡発掘調査報告」市川市教育委員会 1996
- 5 「下総国府台Ⅰ 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第1次調査概報」和洋学園 1997
「下総国府台Ⅱ 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第2次調査概報」和洋学園 1998
「下総国府台Ⅲ 和洋学園国府台キャンパス内遺跡第3次調査概報」和洋学園 1999
- 6 「平成10年度 市川市内遺跡発掘調査報告」市川市教育委員会 1999
- 7 「昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告」市川市教育委員会 1981
- 8 「市川市新山遺跡－北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－」（財）千葉県文化財センター 1990
- 9 「須和田遺跡第6地点」市川市教育委員会 1992
- 10 「下総国分寺跡 平成元年～5年度発掘調査書」市川市教育委員会、市立市川考古博物館 1994
- 11 「下総国分尼寺跡Ⅰ」昭和57年度調査報告 市立市川考古博物館 1983
「下総国分尼寺跡Ⅱ」昭和58年度調査報告 市川市教育委員会、市立市川考古博物館 1984
「下総国分尼寺跡Ⅲ」昭和59年度調査報告 市川市教育委員会、市立市川考古博物館 1985
「下総国分尼寺跡Ⅳ」昭和60年度調査報告 市川市教育委員会、市立市川考古博物館 1986
- 12 「日本考古学年報第20号」日本考古学協会 1972
- 13 「収藏品図録Ⅰ」市立市川考古博物館 1981
- 14 「市川市史」第2巻 吉川弘文館 1974



第3図 調査状況（下層・上層）

第2章 古墳時代～奈良・平安時代

第1節 住居跡（第4～7図、第1表、図版3～6）

第13地点の今回の調査ではB区とC区において、住居跡はそれぞれ1軒ずつ検出されているが、遺存状態は極めて悪かった。出土した遺物についても7世紀から8世紀まで時期的に幅をもつため、明確に時期の決定を行うことはできなかった。

001住居跡（第4・6図、第1表、図版3～4・6）

B区の1E87グリッド付近に位置する。平面形はN-15°-Wに軸をもち方形を呈するものと思われるが、南北分は擾乱により失われている。現存長は2.7m×5.5mで、検出面からの深さは0.25mである。柱穴は2本検出した。径は0.6m～0.8m、深さは0.4m～0.5mである。カマドの部分を除いて壁溝がめぐっている。覆土は水平に堆積しており、埋め戻しなどの可能性も考えられる。貼り床も一部検出されているが、しまりがない。

カマド

北壁ほぼ中央に位置する。残りが極めて悪かったため、カマド単独の調査は行っていない。左ソデ部と右ソデ部をごく一部残存する。

出土遺物

001住居跡全体で、約750点の破片が出土した。遺物は須恵器・土師器杯・壺・瓶・皿・有台皿である。遺物は覆土一括の遺物が多く、床面出土のものは小破片のものが多い。時期的には古墳時代から平安時代のものが混在する。第6図1～5の遺物から7世紀代としたが、これ以降の遺物も第6図6・7に掲載した。

1 土師器の杯である。ほぼ完形である。丸底で、口径10.6cm、器高3.0cmである。色調は、内外面ともに橙色を呈す。胎土には、微砂粒、スコリアを含む。器壁は全般的に荒れている。外面は体部にヘラケズリを行っている。覆土一括。

2 土師器の杯である。3分の1ほど残存する。丸底で、口径12.2cmである。口縁部を欠損する。色調は、内外面ともにぶい黄橙色・黒色を呈す。胎土には、微砂粒、スコリアを含む。器壁は全般的に荒れている。外面は体部にヘラケズリ、内面はナデを行っており、内外面は漆仕上げであろうか、黒色の付着物がみられる。覆土一括。

3 土師器の壺である。口縁が3分の1ほど残存する。口径22.2cm、残存器高5.6cmである。色調は、内外面ともに橙色を呈す。胎土には、砂粒、スコリアを含む。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリを行っている。器壁は薄く、内面の一部が剥落している。覆土一括。

4 土師器の壺である。口縁がほぼ完形する。口径22.9cm、残存器高10.4cmである。色調は、内外面ともに、ぶい褐色・明褐色を呈す。胎土には、長石、白色砂粒、スコリアを含む。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリを行っている。器壁は薄い。ごく一部に黒色の付着物がみられる。床上出土。

5 土師器の瓶である。3分の2ほど残存する。口径26.5cm、底径12.2cm、残存器高29.0cmである。色調は、内面が赤褐色・ぶい黄橙色、外表面がぶい黄橙色・明赤褐色を呈す。胎土には、雲母、砂粒を含む。外面は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラケズリを行っている。床上出土。

6 土師器の杯である。ほぼ完形である。口径12.7cm、底径6.4cm、器高3.8cmである。色調は、内外面ともに明赤褐色を呈す。胎土には、雲母、砂粒、スコリアを含む。体部が回転ヘラケズリ、底部が回転糸切り後、回転ヘラケズリを行っている。床上出土。

7 土師器の皿である。底部の4分の3ほど残存する。底径6.8cm、残存器高2.0cmである。色調は、内外面とも明褐色を呈す。胎土には、雲母、白色砂粒を含む。外面はヘラナデ、底部に回転糸切りの痕跡を残す。

8 土師器の有台皿である。3分の1ほど残存する。口径14.4cm、底径7.3cm、残存器高2.6cmである。色調は、内面にはぶい黄橙色、外面は明赤褐・にぶい黄橙色を呈す。胎土には、微砂粒、スコリアを含む。内面はヘラナデ、底部に回転糸切りの痕跡を残す。

005住居跡（第5・7図、第1表、図版4～6）

C区の2B08グリッド付近に位置する。平面形はN-9°-Wに軸をもつ小型の方形を呈するものと思われるが、カマド及び南西隅を除いてほとんどが調査区外にあたり、遺存状態も極めて悪い。検出面からの深さは0.47mである。覆土は部分的に不自然な堆積をしており、埋め戻しなどの可能性も考えられる。

カマド

北壁ほぼ中央に位置するものと思われる。残りは悪い。カマドの火床部に深さ0.4mのピット状の掘り込みをしてその後山砂を主体とした土で埋めている。煙道部の上部が燃焼による顕著な赤化を示しているのに比べ、ピット状の埋め土部を含め、いわゆる火床部にはほとんど焼けた痕跡がみられない。

出土遺物

005住居跡全体で、約200点の破片が出土した。覆土一括の遺物が多い。図示した遺物は調査区の南東端からほぼ完形に近い甕が口縁部を下にしてつぶれた状態で出土している。

1 土師器の甕である。口縁部から胴部にかけて3分の2ほど残存する。口径23.6cm、残存器高27.0cmである。色調は、内外面とも明赤褐色を呈す。胎土には、雲母、砂粒、荒砂粒、スコリアを含む。外面は胴部がヘラケズリを行っており、一部剥落している。内面は剥離し、整形痕は不鮮明である。口縁部には輪積痕がみられる。床上出土。胴部中央に穿孔された痕跡がみられる。

第2節 土坑（第5・8図、第1表、図版5・6）

第13地点の今回の調査ではC区において、土坑が1基検出されているが、ほとんどが調査区外にあたり、遺存状態も極めて悪いため、詳細は不明である。掘立柱跡あるいは住居跡の貯蔵穴の可能性も調査時に指摘されている。

003土坑（第5・8図、第1表、図版5・6）

C区の1B95グリッド付近に位置する。遺存度は南東部の4分の1ほどである。検出面からの深さは0.45mである。覆土は、レンズ状を呈し、自然堆積であると考えられる。

出土遺物

覆土中から奈良・平安時代の2点の土師器と須恵器破片が出土しているが、本遺構の帰属時期を明確に決定できる資料とはいえない。

1 須恵器の杯である。2分の1ほど残存する。口径14.0cm、底径7.5cm、器高3.2cmである。色調は、

内面が灰色で、外面は灰褐色を呈す。さらに外面には重ね焼きによる焼け斑が見られる。胎土には、白色針状物を多く含む。底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリを行っている。南比企産の須恵器と思われる。8世紀後半に位置づけられようか。

第3節 その他（第9図、第1表、図版6）

ここでは、遺構に伴わなかった遺物に関して説明する。なお、本報告では掲載しないが、A区では近世の溝1条・土坑1基、B区では調査時には中世とされた溝が2条検出されている。B区の溝については覆土の堆積状況、005住居跡・003土坑との新旧関係が不明であること、中世の遺物が皆無であることなどから時期の決定は行うことができなかった。

出土遺物（第9図、第1表、図版6）

遺物は灰釉陶器碗・土師器有台皿・土師器杯・女瓦・敲石である。A区及びC区一括の表採遺物である。A区では約180点、B区では遺物がなく、C区では約290点の遺物が出土している。

1 土師器の杯である。4分の1ほど残存する。口径12.5cm、残存器高3.8cmである。色調は、内外面ともに上半部は黄灰色・一部黒褐色を呈し、下半部はにぶい黄褐色を呈す。胎土には、長石、雲母、黒色粒子を含む。外面の口縁部から体部中央にかけて帯状に薄く炭化物が付着している。

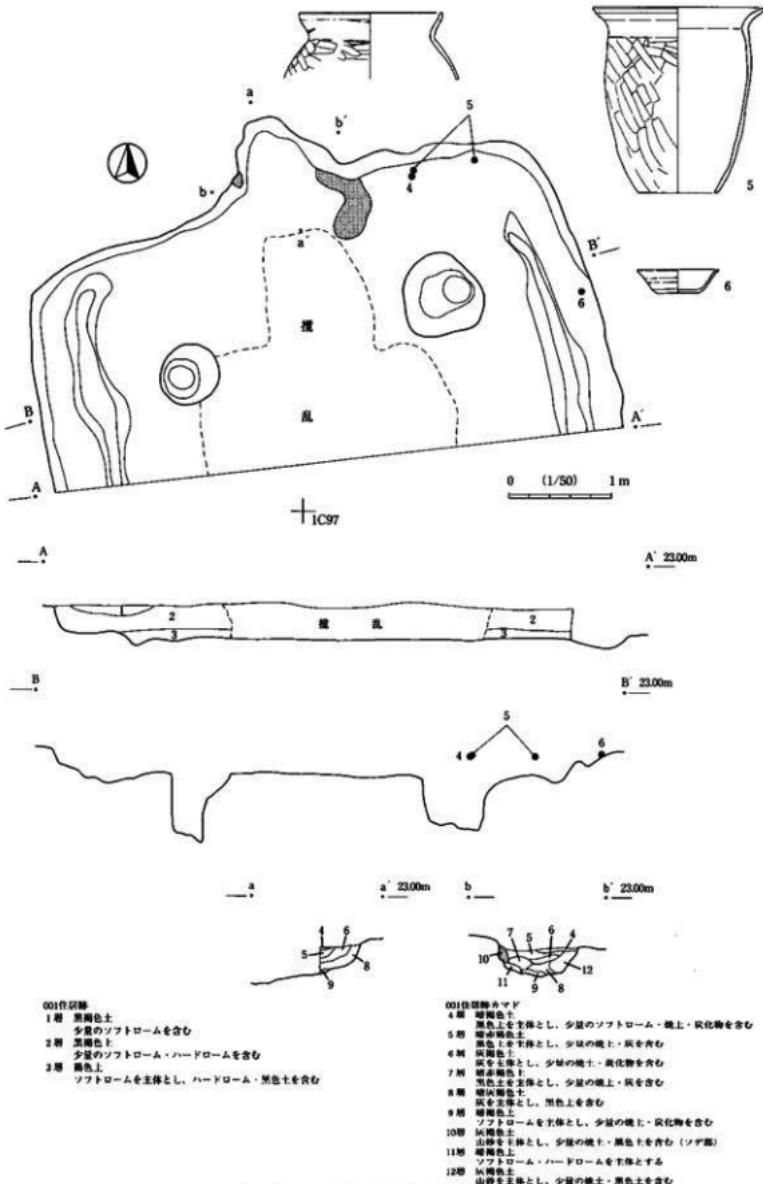
2 土師器の杯である。4分の1ほど残存する。底径6.6cm、残存器高2.2cmである。色調は、内外面ともににぶい黄褐色・一部褐灰色を呈す。胎土には、長石、雲母、赤色・黒色粒子を含む。底部に回転ヘラケズリの痕跡が見られる。

3 灰釉陶器の碗である。高台部の4分の1ほど残存する。底径6.0cm、残存器高1.4cmである。色調は、内外面とも灰色を呈す。胎土には、長石、黒色粒子を少量含み、極めて良質である。底部は糸切り痕が見られるので、貼付高台と思われる。

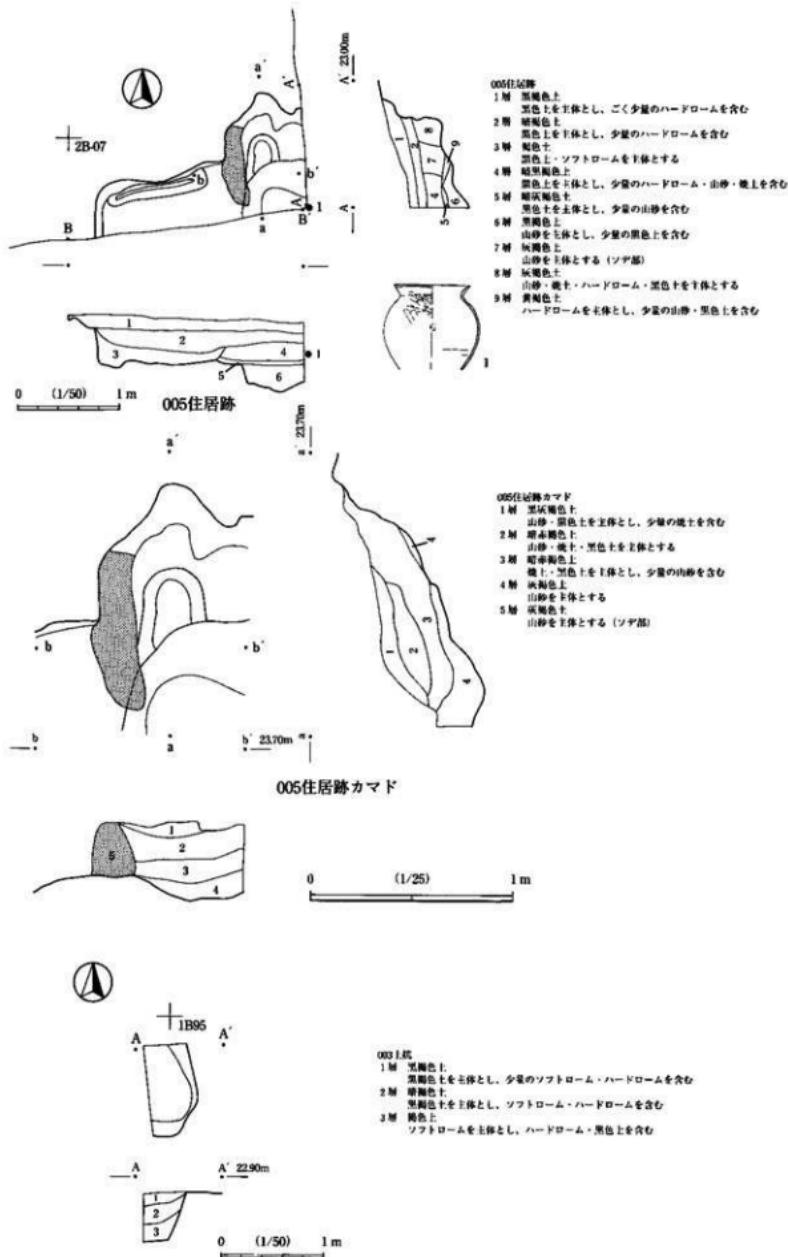
4 土師器の有台皿である。底部の3分の1ほど残存する。丸底で、底径6.8cm、残存器高1.6cmである。色調は、黄橙色を呈す。内外面ともに若干摩耗している。胎土には、長石、雲母？、細砂粒、黒色粒子を含む。底部は円盤状高台で糸切り痕が見られる。

5 女瓦である。凹面に布目痕、凸面に繩目痕が見られる。色調は、内外面とも暗黄灰色を呈す。胎土には、砂粒、赤色・黒色粒子を含む。

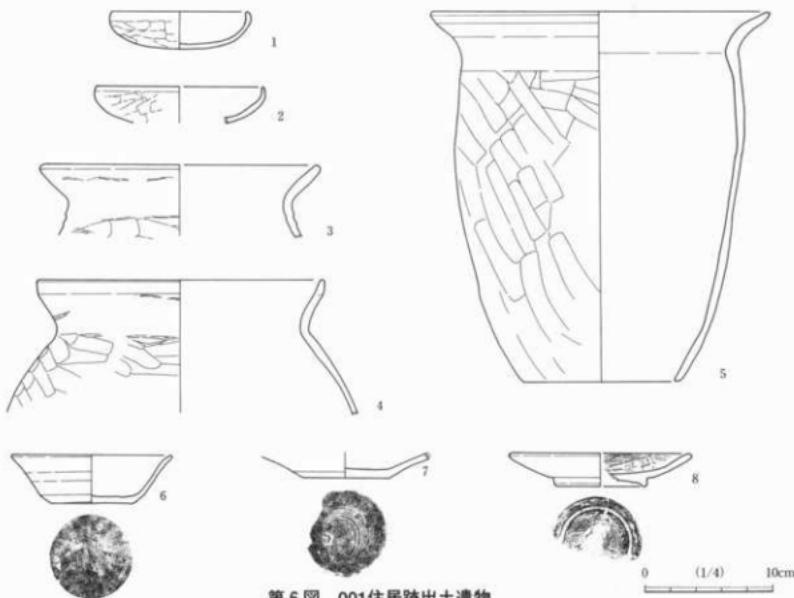
6 薄い赤褐色の安山岩製の敲石である。ごく一部に鉄分？らしい赤褐色の付着物と黒色の付着物がみられる。表面中央部及び側面の一部に敲打によるものと思われる浅い痕跡が見られる。形態からは縄文時代の敲石類の可能性も考えられるが、表面に着いた付着物が埋設管等の鏽など後世の影響によるものでなければ製鉄関係の遺物としても良いのかもしれない。ここでは縄文時代の遺物が皆無であることから、古墳時代～奈良・平安時代の遺物としておく。



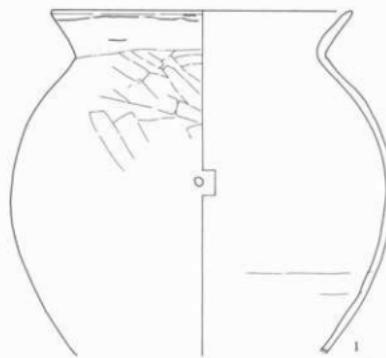
第4図 001住居跡平面図・断面図



第5図 005住居跡平面図・断面図、003土抗跡平面図・断面図



第6図 001住居跡出土遺物



第7図 005住居跡出土遺物



第8図 003土抗出土遺物



第9図 グリッド出土遺物

第1表 遺物観察表

() 残存長・復元

登録番号	部類	品種	遺存状	L.L.径	断面	断面	段差	断面	地	成	色調(内・外)	黑色乳頭	本	形	出土状況	調査番号	備考
001-61	土器	杯	90%	(10.6)	—	(3.0)	石器・骨器	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	有	直	直	直上・横	5-1	此部 ハラケズリ
62	土器	杯	30%	(12.2)	—	—	灰白色	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	无	直	直	直上・横	—	全体 ハラケズリ 内、外、邊紅茶引
63	土器	甌	L.L.径 30%	(22.2)	—	(5.6)	砂粒・スコリア	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	无	直	直	直上・横	—	L.L.部 ロココア 底部 ハラケズリ
64	土器	甌	L.L.径 30%	(22.9)	—	(10.4)	長石・白色砂粒 スコリア	良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	无	直	直	直上	—	L.L.部 ロココア 底部 ハラケズリ
65	土器	甌	60%	(26.5)	(12.2)	(29.0)	雲母・多孔	良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	有	直	直	6-3	L.L.部 ロココア 底部 ハラケズリ	
66	土器	杯	90%	(12.7)	(6.4)	(3.8)	雲母・砂粒 ・スコリア	普通	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	无	直	直	6-2	全体 回転ヘラケズリ 底部 回転赤褐色 底部 ハラケズリ	
67	土器	甌	底部 30%	—	6.8	(2.0)	高石・白色砂粒	良	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	无	直	直	直上・横	—	全体 ハラケズリ 底部 变色毛切り
68	土器	合口甌	40%	(14.4)	(7.0)	(2.6)	砂粒・スコリア	良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	无	直	直	直上・横	—	内ルートイギリ 底部 回転赤褐色
005-91	土器	甌	70%	(23.6)	—	(27.0)	雲母・砂粒 ・スコリア	普通	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	无	直	直	6-4	L.L.部 細粒赤褐色 底部 ハラケズリ 全体	
003-81	風呂	桶	60%	(14.0)	7.5	4.2	白色砂粒	良	灰褐色	灰褐色	灰褐色	无	直	直	直上・横	6-5	全体 回転赤褐色 底部 ハラケズリ 外 美な焼きによる焼 け跡
A区 9-1	土器	杯	30%	(12.5)	—	(3.8)	長石・雲母 ・黑色粒子	良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	无	直	直	直上・横	—	L.L.部～全体 黄化帶 外 エスカロナ
9-2	土器	杯	30%	—	(6.6)	(2.2)	長石・雲母 ・黑色粒子	良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	内	直	直	直上・横	—	底部 細粒ヘラケズリ
C区 9-3	風呂	洗面陶	高台部 剥離 30%	—	(6.0)	(1.4)	長石・雲母 ・黑色粒子	良	灰褐色	灰褐色	灰褐色	无	直	直	直上	—	底部 脱付高台
9-4	土器	合口甌	底部 30%	—	(6.0)	(1.6)	長石・雲母・砂粒 ・黑色粒子	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	无	直	直	直上	—	底部 内壁赤高台・ 回転赤褐色 内側 变色毛切り
A区 9-5	風呂	桶	底	(5.6)	(10.4)	(2.5)	砂粒・黑色粒子	普通	暗黄褐色	暗黄褐色	暗黄褐色	无	直	直	直上	6-6	底部 变色毛切り
9-6	石器	磨石	底	(5.6)	(10.4)	(2.5)	—	—	—	—	—	—	直	直	直上	6-7	底部 变色毛切り

第3章　まとめ

第1節　古墳時代～奈良・平安時代

今回の国府台遺跡第13地点A区～C区の発掘調査では、病院施設の増築工事に伴う調査であったことから、埋設管などによる擾乱が激しく遺構等の遺存状態は極めて悪かった。全体で1500点近く出土した遺物についても接合はするものの完形に近い状態にまで復原されるものはなかった。しかし、隣接する地域の須恵器や武藏型の壺・常総型の壺の存在などこの地域の政治・文化の中心点及び交通の結節点としての様相の一端がうかがわれる。

遺構としては7世紀代～8世紀代の住居跡が2軒、土坑が1基検出された。他にC区では発掘終了時点でも中世とされた溝が2条検出されているが、中世の遺物が皆無であること、極めて薄い覆土の堆積状況、奈良・平安時代の005住居と003土坑との新旧関係が不明であることから時期は決定できず、本報告書には掲載していない。さらにA区では調査の時点で近世と判断された溝1条・土坑1基については、前記遺構と同じく本報告書には掲載していない。

B区の001住居跡は、図示した土器以外に在地系の須恵器、内黒の杯、武藏型の壺などが出土している。破片が多く、時期を明確に決定できる資料はないが、古墳時代～奈良・平安時代に位置づけられよう。

C区の005住居跡は、図示した土器以外に在地系の須恵器、赤彩の杯、内黒の杯、常総型の壺の破片などが出土している。破片が多く、時期を明確に決定できる資料はないが、古墳時代～奈良・平安時代に位置づけられよう。

C区の003土坑は、ほとんど調査区外にあたり、遺存状態も悪いため、詳細は不明であるが、奈良・平安時代に位置づけられよう。

グリッドの一括表採出土としてはA区から下総国分寺関連と思われる女瓦が出土した。また、C区からは縄文時代の敲石に酷似した石製品を見ついたが、これ以外には全く縄文時代の遺物がないことと鉄床石によく見られる赤褐色及び黒色の付着物が見られることからここでは古墳時代～奈良・平安時代の遺物とした。但し、この付着物については、埋設管等の存在から後世の付着とも考えられ、その場合は、縄文時代の可能性もある。

古代下総国府の所在地として推定されている国府台遺跡については、近年調査事例が増えつつあるが、国府の主要施設については解明されたとはいはず、今後の課題である。今回調査された遺構と国府との関係についても今後さらに調査が進めば明らかにされよう。

第2節　その他

下層については遺物が出土しなかったが、基本層序は隣接する武藏野台地に準じており、県内の他の地域に比べ、層序認識の比較的容易なこの地域での遺物・遺構の検出が待たれるところである。

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真（約1:10,000）



C区 基本層序



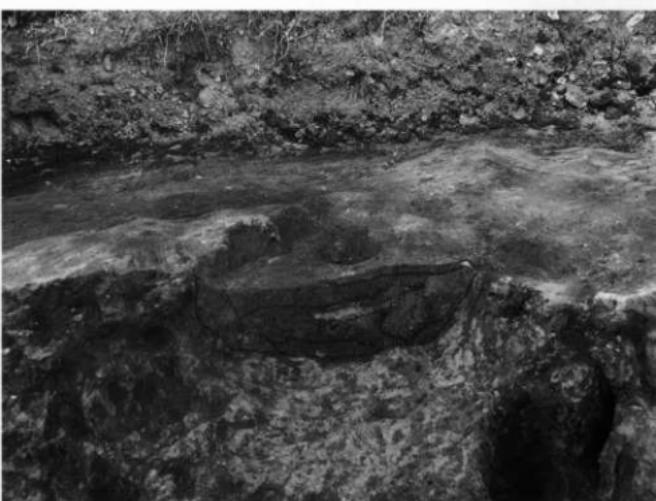
A区 全景



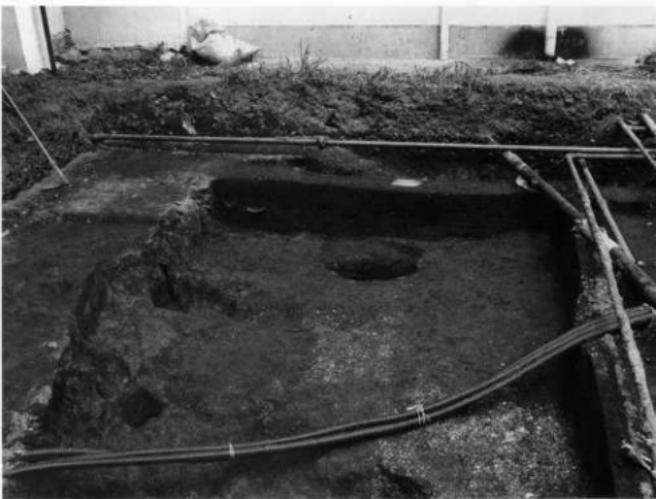
B区 全景



C区 全景



001住居跡カマド断面



001住居跡断面



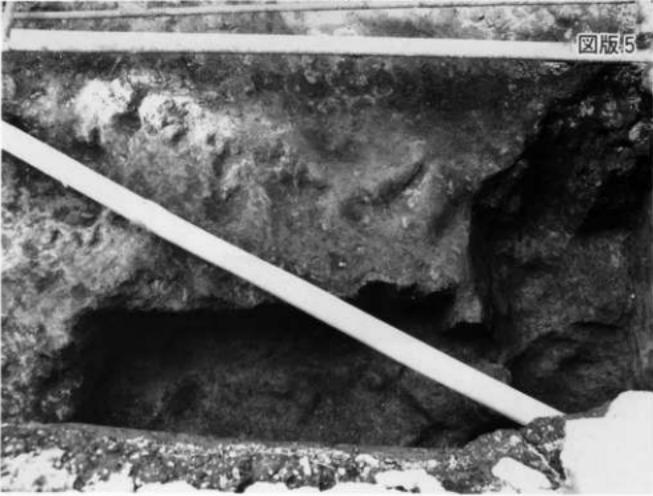
001住居跡（西から）



001住居跡（南から）



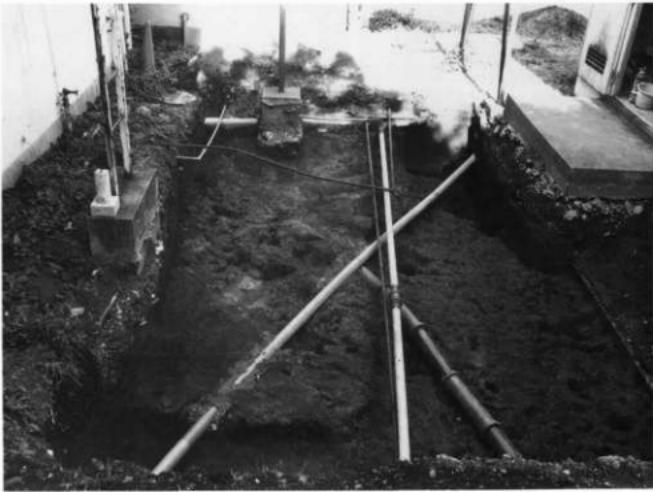
005住居跡（西から）



005住居跡（南から）



003土抗



005住居跡・003土抗（西から）



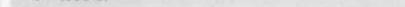
1 (001-1)



2 (001-6)



3 (001-5)



4 (005-1)



5 (003-1)



6 (A区-5・A区-6) 表



7 (A区-5・A区-6) 裏

報告書抄録

ふりがな	いちかわしこうのだいいせきだいじゅうさんちてん							
書名	市川市国府台遺跡第13地点							
副書名	国立精神・神経センター国府台病院施設増築埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第408集							
編著者名	田島 新							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
国府台遺跡 第13地点	千葉県 市川市 国府台 1丁目2番地2	203	003	35度 44分 36秒	139度 54分 30秒	19990802 ~ 19990827	256m ²	国立精神・神経センター国府台病院施設増築工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国府台	集落	古墳時代～奈良・平安時代	住居跡 土坑	2軒 1基	須恵器・土師器・灰釉陶器・瓦・石製品			古墳時代～奈良・平安時代の集落跡の一部を検出した。

千葉県文化財センター調査報告第408集

市川市国府台遺跡第13地点

— 国立精神・神経センター国府台病院施設増築埋蔵文化財調査報告書 —

平成13年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 国立精神・神経センター国府台病院
市川市国府台1丁目2番地2

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2
